Yamaguchi University

山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第23号（2007. 3）

“田舎”体験と子どもの精神的自立

――山口県岩国市本郷における山村留学の20年を通して――

山下　稔哉*・仲程　誠**・佐古三代治**・木谷　秀勝

Meaning of Rural Experience on the Psychological Independence of Children Through the 20-years of Rural-Experience-Program in Hongo-Iwakuni, Yamaguchi-Prefecture

YAMASHITA Toshiya*, NAKAHODO Makoto**, SAKO Miyoji**, KIYA Hidekatsu

(Received January 12, 2007)

キーワード：山村留学、精神的自立、自律性、社会性

はじめに

山村留学とは、都市部の子どもたちが、数ヶ月間から数年間の長期にわたって家族のもとを離れ、農山漁村で生活し学ぶこと、およびそうした子どもたちの受け入れを目的として農山漁村で行なわれる教育支援事業のことである（川前ら，2005）。山村留学は昭和51年に長野県八坂村（現大町市）で最初に始まった（財団法人育てる会，2001）。その後、日本全国で急速に過疎化・少子化が進むなか、都市部の子どもたちを受け入れて地域の活性化を図りたいと考える農山漁村と、豊かな自然や伝統文化、あるいは村落共同体の温かな人間関係にふれることなどを通して子どもを健全に成長させたいと願う都市部保護者のニーズが合致した結果、各地に広がった。平成17年度現在、山村留学を経験した子どもは、全国155市町村の285校で、のべ13,288人にのぼる（財団法人育てる会，2006）。

現代においては、マスコミ、インターネット、テレビゲームなどのバーチャルなメディアが普及することによって子どもの現実体験が希薄になっている問題や、特に都市部で家庭・地域の教育力が低下している問題が指摘されており、こうした問題を背景に、“都市”が急速に失いつつある体験・教育機能を“田舎”の立場から提供する存在としての山村留学に寄せられる期待がますます高まっている。

1．問題と目的

山村留学は、こうした背景のもと、幅広い効果が期待される一方で、制度的あるいは理論的に明確な裏づけを持たないまま、各地の住民や自治体が個別に手探りで事業をスタートさせるケースが少なくないため、それに伴う問題がいくつか発生している。最も大きな

*山口大学教育学部科目等履修生　**岩国市教育委員会本郷山村留学センター

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

問題は、これまでに山村留学生を受け入れた全国285の小中学校のうち、４割に近い105校で、「留学生の確保が困難」、「資金難」、「過疎・少子化で学校そのものが廃校になる」、「市町村合併に伴う行政の方針転換」などの理由から、中途で事業の継続を断念している点である（財団法人育てる会，2006）。山村留学を安定的に継続することは必ずしも容易ではない。また、平成17年度に留学生を募集した180校の所在地をみると、北海道、中部、九州沖縄の3地域で128校（71.1%）を占め、地域的な偏りが大きい。特に中国地方にはわずか４校しかなく、全国的に最も実績が少ない（財団法人育てる会，2006）。“都市”で失われつつある体験・教育機能を“田舎”の立場から提供するという山村留学の役割を考えれば、このように極端な地域的偏りは好ましいものではない。さらに、山村留学の体験が子どもに与える影響についての学術的な調査研究がほとんど行われていないため、経験的にその価値が語られることはあっても、山村留学の効果や改善すべき点などについて体系的に議論することが困難なのが現状である。

以上のような山村留学がかかえる問題点を踏まえ、筆者らは、現代における“田舎”体験が子どもの精神的自立に重要な役割を果たしていることを明らかにする目的で、山口県岩国市本郷で行なわれている山村留学について調査研究を行った。本郷の山村留学を対象としたのは、本郷では、昭和62年度に当時の本郷村（平成18年に合併し、現在は岩国市）として山村留学をスタートさせて以来、現在（平成18年度）まで20年間に渡って継続して留学生を受け入ており、地域別に見ると最も山村留学事業が少ない中国地方にあって、年度ごとの受け入れ人数で全国７位の実績を上げるなど（財団法人育てる会，2006）、その取り組みの継続性と質の高さが注目されているからである。

２．山口県岩国市本郷の概要と山村留学の現状

岩国市本郷（旧本郷村）は山口県の北東部に位置し、広島県との境をなす1000ｍ級の山々に囲まれた、中国山地で最も山深い地域の一つである。人口はおよそ1300人、基幹産業は農業である。夏季は昼夜の温度差が大きく、一年を通して豊かできれいな水に恵まれていることから、おいしい米がとれる地域として知られている。山村留学生が食べるご飯は、全て本郷の農家が生産した地元産米である。冬季にはまとまった積雪がある。県の無形民俗文化財に指定されている山代本谷神楽や、村を挙げての夏祭り、秋の奉納相撲大会など、近世から現代に連なる地域の伝統文化を色濃く継承している点も本郷の特徴である。

留学生が寄宿する本郷山村留学センター（図１）は、岩国市役所本郷総合支所、郵便局、スーパー、公民館などが集まる、地域の中心部にある。居室は４～６人の相部屋で、留学生は寝食を共にしながら地元の本郷小・中学校で学ぶ。山村留学センターから本郷小・中学校までは徒歩５分程度で、通学路周辺の車輌の通行は少ない。本郷の中心部に設置されている信号は、山村留学センター前の１つだけである。近隣にコンビニエンスストアやゲームセンターは存在しない。

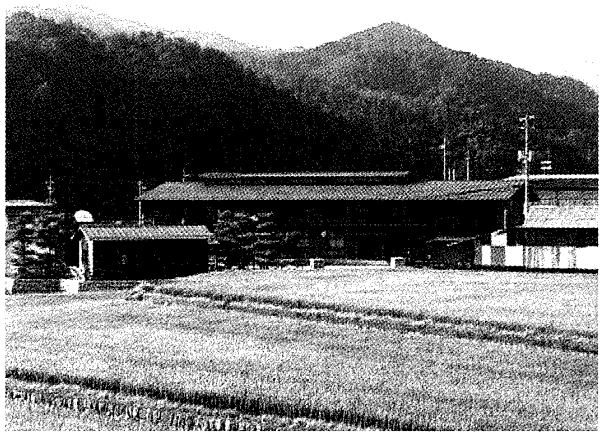

図１．本郷山村留学センター

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

本郷山村留学センターの職員体制は、常勤の所長１名、非常勤の指導員３名（男性１名、女性２名）で、夏、冬、春の長期の休みを除いた全ての時間、一部で小・中学校教諭の協力を得ながら、１日24時間、衣食住、健康管理、勉強、余暇活動など生活の全般にわたって子どもたちのサポートを行なっている。毎日の食事の準備は、非常勤の寮母３名が交代で担当している。

表１に留学生の一日のスケジュールを示す。基本的な内容は、山村留学が始まった20年前から、ほとんど変わっていない。加えて、食事の配膳、朝の風呂掃除、館内の清掃、ゴミ出し、洗濯物の取り込みなどは留学生の仕事で、当番を決めて毎日分担して行なわれる。また、洗顔をする、食事を残さない、歯みがきをする、部屋の片づけをする、洗濯物を出すといった身のまわりのことは自分でできるようになることが求められる。小学校高学年の子どもでも、わがまま放題の家での生活とは異なる山村留学センターの生活に適応するために、相当の時間を要する。しかし、いったん適応すれば、生活のリズムが整うため、好き嫌いがなくなる、体力が増す、勉強の習慣がつくなど、健康面や学習面にさまざまな好ましい影響が現れるようになる。

表１．本郷山村留学生の１日

時間	活動内容
6:30～	起床・着替え
7:00～	朝食・登校準備
7:40	登校
	学校での学習活動 スポーツ少年団活動 行事など
17:00～	夕べの集い・清掃・入浴
18:00～	夕食
18:30～	だんらん時間(テレビはこの間のみ)
19:30～	学習時間
20:30～	夜の行事・登校準備・就寝準備
21:00	小学生就寝
22:30	中学生就寝（完全消灯）

土・日、祝祭日も、特別な事情が無い限り基本的にこのスケジュールで行なわれる。

留学生が参加する主な年間行事について、表２に一部を示す。ほとんど毎週末、農作業、野外活動、地域の伝統行事などが目白押しである。したがって、留学生は休みの日に、「暇でやることがない」ということはありえない。こうした多彩な活動は、本郷の地域住民に支えられて行われている。

留学生の出身地域（表３）は、山口県内が３割強で最も多く、隣接する福岡県と広島県を加えると７割弱となる。これに、大阪、東京の出身者を加えると８割に達する(平成18年度現在)。本郷が、山村留学の実績が少ない中国地方と近隣の地域にとって、“田舎”体験を提供する中核的な場になっているとともに、東京、大阪など大都市部の子ども・保護者にとっても魅力ある山村留学の対象地域になっていることが理解できる。

表２．年間の主な行事

４月	入所式、歓迎お茶会、いも植え、錦帯橋遠足
５月	しゃくなげマラソン、羅漢山登山、田植え
６月	琴と尺八の演奏会、蛍鑑賞
７月	七夕祭り、水泳記録会
８月	夏のキャンプ、天神祭り
９月	小中合同大運動会、梨もぎ
10月	月見会、栗拾い、奉納相撲大会、稲刈り
11月	いも掘り、村民祭り、秋の遠足
12月	クリスマス会、もちつき、雪遊び、カマクラ作り
１月	とんど、紙すき、スキー教室
２月	子ども弁論大会、スキー教室
３月	ひな祭り、修業式

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

表３．本郷山村留学生の出身地域

出身都府県	留学生数（総留学生数に占める割合）	／累積割合
山口	６２人（３０．２％）	／３０．２％
福岡	４４人（２１．５％）	
広島	３３人（１６．１％）	／６７．８％
大阪	１３人（　６．３％）	
東京	１２人（　５．９％）	／８０．０％
佐賀	８人	
岡山	５人	
愛知	４人	
岐阜	４人	
千葉	３人	
愛媛	３人	
沖縄、奈良、滋賀、和歌山、神奈川	各２人	
兵庫、三重、茨城、静岡	各１人	
	計　２０５人	

３．本郷における山村留学生受け入れ数の安定的推移とその背景

本郷における山村留学生の年度ごとの受け入れ数を図２に示す。平成13年度までは小学生のみ、平成14年度からは小学生と中学生の受け入れが行なわれている。平成18年度現在までの受け入れ実数は205人。単年度あたりの留学生数は、最少14人（平成12年度）、最大25人（平成17年度）、平均20.2人で、留学生の数には、年度による顕著な変動が認められない。全国的に少子化が進み、子どもの数が減っているにも関わらず、本郷でこの20年間安定して留学生の受け入れが続いていることは特筆すべきであるが、それには明確な背景がある。

戦後の本郷地域（旧本郷村、現在の岩国市本郷）における小学校児童数は、昭和33年に最大（352人）を記録して以降、一貫して減少を続けている。昭和52年には100人を下回って96人にまで落ち込んだことから、児童数を確保して教育レベルを維持することが本郷地域の差し迫った課題となった。こうした中で、昭和62年度、旧本郷村の事業として山村留学がスタートしたのである。この年度の本郷地域の全児童数は84人。戦後ピーク時の四分の一にまで減少しており、その２割近くを占める16人が山村留学１期生であった（本郷村教育委員会, 2000）。以後も地元本郷生まれの子どもの数は減り続けており、近年は本郷地域の全児童数の３割前後が山村留学生という状態が続いている。

このように、本郷地域では、毎年一定数以上の留学生を受け入れることによって子どもの数が維持され、ソフトボール、バスケット

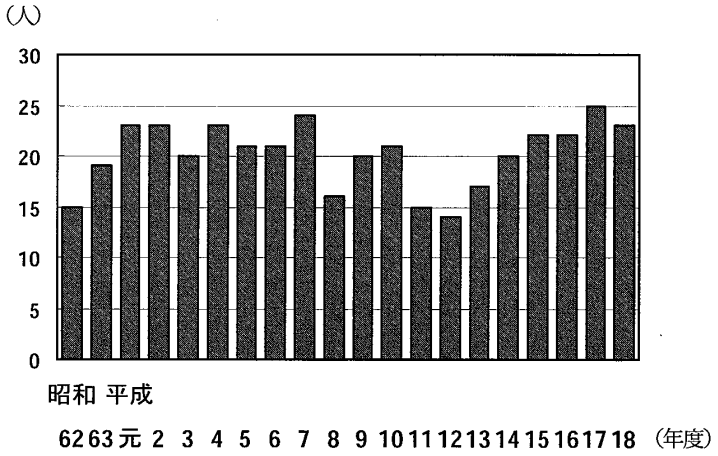

図２．本郷における年度ごとの山村留学生受け入れ数

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

ボールなど各種のスポーツチームを編成して岩国地区の大会に参加したり、運動会や子供相撲大会といった地域の行事を開催したり、神楽など伝統文化の伝承を行なったりといった重要な活動が可能になっている。従って、本郷地域では、「山村留学生は地域に欠かせない存在である」という認識が共有されており、このことが山村留学事業を安定的に維持していくうえでも重要な基盤となっている。

4．単年留学から複数年留学へ

上述のように、本郷における山村留学生の受け入れ数は安定的に推移しているが、一方で、この20年の間に、山村留学のあり方に関わる重要な変化が生じていることが、新規留学生受け入れ数と平均留学年数を見ることで明らかに示される。

図3に、年度ごとの新規留学生受け入れ数の推移を示す。9期生までは毎年度10人を超える留学生が新たに本郷に留学している（単年度平均13.3人）。これに対して、10期生以降は、新規留学生の数が10人を越えたのは11期と19期のみで、9期生以前と比べると新規留学生の数は明らかに減少している（単年度平均7.7人）。それにもかかわらず毎年度の山村留学生の受け入れ数に大きな変化が認められないことから、9期生までは、毎年度、新たに多数の子どもが留学してくる一方、多数が短期で留学を終える傾向にあったのに対して、10期生以降は、新たに留学してくる子どもの数が減ると同時に、短期で留学を終えて本郷を離れる子どもの数も少なくなる（留学が複数年化する）傾向が生じていることが示唆される。

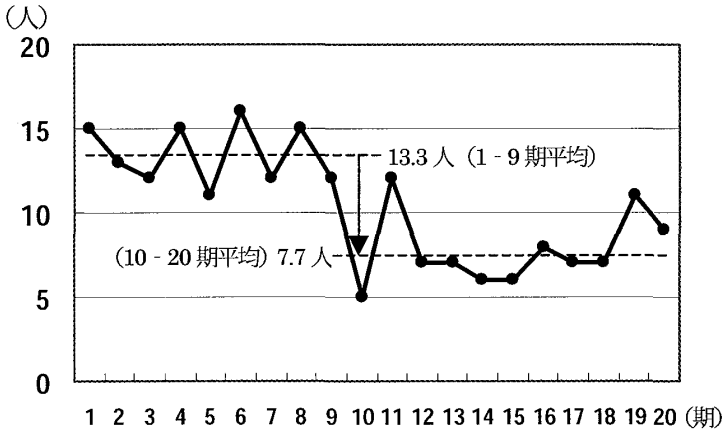

図3．本郷における新規山村留学生受け入れ数の推移

このことを支持するデータとして、図4に、年度ごとの平均留学年数の推移を示す。9期生までは平均留学年数は1.5年前後で推移している。実数では、9期までに本郷で山村留学を修業した110人のうちの70人（63.6%）までが1年で留学を終えている。これに対して、10期生以降の平均留学年数は2.4年を平均値として推移している。実数でみると、10期以降に修業した71人のうちの実に48人（67.6%）が2年以上の複数年の山村留学を行なっている。

以上の結果から、本郷の山村留学において、9期（平成7年度）と10期（平成8年度）の間を境にして、新規留学生の数が減少するとともに、留学年数が増える傾向、すなわち「留学の複数年化」が生

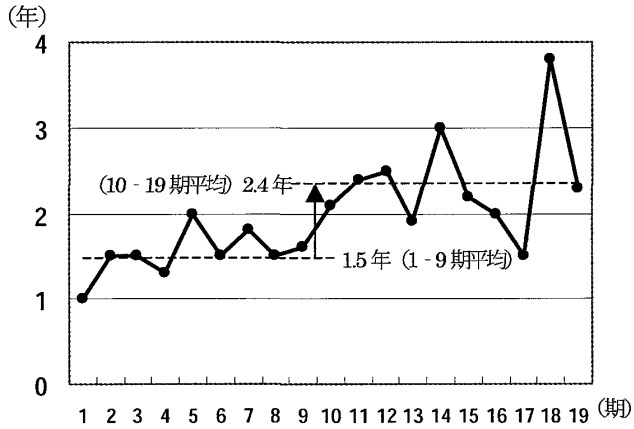

図4．本郷における山村留学生の平均留学年数の推移

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

じていることが理解できる。そしてこの変化が、本郷の山村留学が20年にわたって事業を継続し、高い評価を得るようになった理由を考えるうえで、重要な点になっている。

5．修業文集に記された山村留学生の“成長”の姿

本郷の山村留学を通して子どもたちが精神的にどのような成長をとげるのか、また本郷の山村留学が子どもたちに与える影響は、20年の歴史を重ねるなかでどのように変化してきたのかを検討するため、筆者らは修業文集の分析を行なった。修業文集とは、子ども達が山村留学体験を振り返って心に残ったことを綴った文集で、毎年度末に関係者に配布され、「留学生のホンネがよく出ている」と評価されている。分析の対象にしたのは、保存されていた5期以降19期までの修業文集で、掲載されている作文を一つ一つ読み、自らの体験や成長に言及している内容を抜き出して分類を行なった。その結果、修業文集に記されている内容は、表4に示すように、『新しい体験』、『自律性』（【受動的水準】と【自立的水準】）、『社会性』（【受動的水準】と【自立的水準】）の5つのカテゴリーに分類することができた。

表4．山村留学生の修業文集における記述に関する5つの分類カテゴリー

新しい体験		◆自然の豊かさを体験する ◆農業を体験する ◆伝統文化を体験する ◆地域・学校などの行事を体験する ◆スポーツを体験する
自律性	受動的水準	◆食事・排泄のコントロールが出来る ◆起床・就寝など一日のリズムが整う ◆整理整頓など身のまわりのことが出来る ◆勉強をする習慣がつく
	自立的水準	◆何事もまず自分でしようと思う ◆チャレンジ・熱中・継続の価値を知る ◆自分は変わることができると感じる
社会性	受動的水準	◆ケンカをしない、ウソをつかない ◆適切な言葉づかいをする ◆友だちができる ◆助けられたことを感謝する ◆係・役割・当番を分担する ◆下級生の世話をする
	自立的水準	◆他人の気持ちを考えて行動する ◆友だちを支えたり励ましたりする ◆リーダーシップを発揮する

（1）『新しい体験』とは、自然、伝統文化、スポーツなど、山村留学を通して初めての出来事に接することができた喜び、驚き、楽しさなどに言及しているもので、体験の内容により5つの項目に整理される。

（2）『自律性』とは、自分自身の個人的成長に言及したもので、二つの下位水準に分けられる。一つは、「起床・就寝など一日のリズムが整う」、「勉強をする習慣がつく」など、決められたルールに基づいて受動的に自己管理ができるレベルの4項目で、これらを【受動的水準】とする。一方、「チャレンジ・熱中・継続の価値を知る」、「自分は変わることができると感じる」など自発性に基づいた行動選択ができるレベルを示す3項目は【自立的水準】に位置づける。

（3）『社会性』とは、対人関係を中心とした社会的スキルの向上に言及したもので、二つの下位水準に分けられる。一つは、「ケンカをしない、ウソをつかない」、「係・役割・当番を分担する」などの抑制的・受動的なレベルの6項目で、これらを【受動的水準】とする。一方、「友だちを支えたり励ましたりする」、「リーダーシップを発揮する」などの3項目は、状況にふさわしい主体的判断を要する能動的で高度なスキルであることから、

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

【自立的水準】に位置づける。
（4）『自律性』、『社会性』いずれにおいても、【受動的水準】は、ルールに従い与えられた役割をこなすことができる初歩的な段階であり、日常的なイメージとしては、「決まりごとや約束を守り、言われたことはちゃんとやる」という状態である。これに対して、【自立的水準】は、主体的な判断や自発的な選択に基づく行動ができるようになった、より発達の進んだ段階であり、イメージとしては、「集団の中でリーダーシップを発揮することができ、個人的にも打ち込めるものを持っている」というレベルに相当する。
（5）多様な形でなされる山村留学生の修業文集における記述を以上のような基準を用いて5つのカテゴリー（『新しい体験』、『自律性【受動的水準】』、『自律性【自立的水準】』、『社会性【受動的水準】』、『社会性【自立的水準】』）に分類したうえで記述内容を検討することによって、本郷の山村留学体験が子どもたちの精神的自立にどのような影響を与えているかを整理して理解することができる。

6．“自律的・能動的成長”型の山村留学を支える「留学の複数年化」

表5に、8期生（単年留学主体）と12期生（複数年留学主体）の修業文集に掲載された作文について、一人一人の記述内容を表4のカテゴリーに基づいて分類した結果を示す。分類の作業は、作文の記述と、表4の項目とを照らし合わせ、表4の項目にあてはまる記述が、対応するカテゴリー内に1つある場合にはそのカテゴリーに○を、複数ある場合には◎を与える。当てはまる記述がない場合は空欄とする。
例えば、8期No．8（小4）の留学生の作文についてみると、

「…①さびしくなっても遊ぼうといってくれる友達、私はとってもうれしかったです。そして②毎月できる誕生会や映写会、たのしい出し物やおいしいケーキ、私にはとっても最高だった。そして③せんたく当番、たいへんでとてもいやになってきます。…」

という記述がなされており、下線部①は『社会性【受動的水準】』の「友だちができる」に該当し、下線部②は『新しい体験』の「地域・学校などの行事を体験する」に、下線部③は『社会性【受動的水準】』の「係・役割・当番を分担する」に該当することから、『新しい体験』のカテゴリーに○、『社会性【受動的水準】』のカテゴリーに◎（あてはまる記述が2つあるため）が与えられることになる。
8期と12期の修業文集を比較した結果、認められる最も顕著な違いは、【自立的水準】（表5、グレーで示す）に該当する記述の有無である。単年留学主体の8期では、【自立的水準】に該当する記述はNo．18（留学年数2年）に1つ認められるだけで、単年留学のNo．1～13には認められない。一方、複数年留学主体の12期では、留学年数2年以上の高学年（5、6年生）の子ども11人全て（No．11～21）と、留学年数1年の高学年4人のうち3人（No．5～7）で【自立的水準】の記述が認められる。このような傾向は、多少の違いはあれ、他の単年留学主体の年度、複数年留学主体の年度においても、同様に認められる。こうした結果は、複数年留学主体の山村留学においては、単年留学主体の山村留学と比べて、より水準の高い自律性や社会性が獲得される傾向があることを示している。また複数年留学主体の人員構成のもとでは、留学年数の短い子どもにおける自律性や

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

表５．山村留学８期生と12期生の修業文集における記述内容の比較

８期		単年留学													複数年留学					
No.		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
学年		小1	小2	小2	小2	小2	小4	小4	小4	小5	小5	小5	小6	小6	小3	小4	小5	小5	小6	小6
留学年数		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	2	2	4	2	2
新しい体験		○		○	○	◎			○				○	◎			◎	○		○
自律性	受動的水準			○	○					◎	○	○			◎	○	○	○	◎	◎
	自立的水準																		○	
社会性	受動的水準	○	◎	◎	○		◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	○	◎	○
	自立的水準																			

１２期		単年留学							複数年留学													
No.		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
学年		小3	小4	小4	小5	小5	小5	小6	小3	小3	小4	小5	小6	小6	小6	小6	小6	小6	小6	小6	小6	小6
留学年数		1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	4	4	5	5
新しい体験		◎	◎	◎		◎	◎	◎	○	○	◎	◎	○	◎	○	◎	◎	◎		○	◎	○
自律性	受動的水準	◎		◎	○	○	○	○		◎	◎	◎	○		◎		◎		○	○	○	○
	自立的水準					○	○	○					◎	○	○	○		○	○	○		◎
社会性	受動的水準	◎	◎	◎	○	◎	◎	◎	◎		◎	◎	◎		○	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎
	自立的水準											◎	○	◎			○	○	◎	◎	◎	○

社会性の獲得も、より強く促されることが示唆される。

実際、12期生の修業文集に見られる【自立的水準】の記述は、豊かでバラエティーに富んでおり、複数年の山村留学を経験した子供たちの成長ぶりが伺われる。以下に、留学年数２年の６年生を対象に、いくつかの【自立的水準】の記述を抜粋する。

【自立的水準：　チャレンジ・熱中・継続の価値を知る】

◆「…先生に『のびろのびろ』と言われてのびて行きました。個人的にギターも習ったりしました。そのことから、あきらめずにがんばりぬくことを教わりました。…」

◆「…ぼくにとっては『どもらなく』なったということがとてもうれしく思います。弁論大会や児童代表の挨拶などにチャレンジしたりするのは勇気がいるけど、やりとげたときはとてもうれしかったです。…」

◆「…なによりおもしろいと思ったのはチェスです。チェスは将棋と似ているんだけどチェスは世界的なゲームです。チェスをやっていると幸せな気持ちになります。チェスはぼくの友だちのような気がします。…」

【自立的水準：　リーダーシップを発揮する】

◆「…なかなかリーダーらしい行動を取れなくて苦労しました。ぼくたち六年生の行動で、これからの留学センターも違ってくるということにも気付きます、ますます自分達の行動に責任を感じました。…」

◆「…最高学年としての責任、学校全体がまとまってとりくむ行事、一つ一つがいい思い出、本当に、この本郷村に来てよかったなあ。…」

ごく一部の抜粋であるが、これらの記述から伝わってくるのは、熱中することができる

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

対象に出会えた喜び、弱点を克服しようと挑戦してやり遂げた達成感、リーダーとしての責任を果たそうとしながらできない苦しさや、みんなの協力を得て責任を果たした充実感などである。いずれの記述からも、留学２年目に入ったことで、身辺のことができたり約束ごとが守れたりする【受動的水準】を卒業して、それぞれに独自の目標に挑戦したり、最高学年としての責任を果たそうとしたりする【自立的水準】へと成長している山村留学生の姿が生き生きと浮かび上がってくる。

このような形で子供たちの精神的自立を促すことができるのが、本郷における山村留学が複数年化したことのメリットである。本郷の山村留学は、単年主体の“体験的・受動的成長”型から複数年主体の“自律的・能動的成長”型へと成長することで、その価値を高めてきたと評価することができる。

７．考察

現在、本郷においては、『山村留学の効果を十分に高めるためには、少なくとも２年の留学期間が必要である』という共通認識が、関係者の間で形成されている。留学１年目は、新しい“田舎”の環境と留学センターのルールや人間関係に適応することによって生活のリズムを整え、それを基礎にして二年目で思い切り自分のやりたいことに打ち込むとともに、後輩の手本になってリーダーシップを発揮するのが最も好ましい留学体験のあり方だと考えられているからである。また、複数年の留学を経験してリーダーシップを取ることができるようになった子どもが増えると、低学年の子どもや留学期間の短い子どもの留学生活への適応もより円滑に進むようになるとともに、様々な行事における留学生全体としての体験の質も高くなることが、経験的に認められている。このような認識は20年間山村留学を続けてきたなかで、より質の高い体験を子供たちに提供しようと、山村留学センターの職員らが試行錯誤を繰り返すことによって形作られてきたものである。

今回の調査研究における分析を通しても、単年留学主体による“体験的・受動的成長”型から、複数年主体による“自律的・能動的成長”型へと変化することによって、本郷の山村留学がその内容を充実させ、子ども達により質の高い精神的自立の機会を提供していることが理解される。

一方で、今後の課題についても、いくつか指摘しておかなければならない。

第一は、平成14年度から中学生の受け入れが始まったため、小学生の時代から継続して最長８年間におよぶ留学を経験する子どもが現れるなど、複数年化を超えた“留学の長期化”が生じている点である。長期の留学を経験して年齢も高くなった中学生に対しては、１～２年の留学を行なう小学生とは異なり、より幅広い体験の選択肢を提供することが重要であるが、この点についての方向性は、現在のところ明確になっていない。

第二は、本郷に来て生活のリズムが整ったにもかかわらず、山村留学を終えて地元に戻ると元の不規則な生活に戻ってしまうという事例がしばしば生じる点である。本郷で規則的な生活を経験することが子どもに好ましくない影響を与える可能性は少ないであろうが、本郷と地元との生活の間に、子どもの適応力だけでは対応しきれない極端な差異があるとすれば、その差異を緩和するようなカウンセリング機能やサポート機能を備えることが、山村留学体験を地元でより効果的に生かしてもらうために必要である。

以上のように、本郷の山村留学は、単に“都市”の子どもに“田舎”体験を提供するだ

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

けではなく、“田舎”に集った子ども達の“自ら成長する力”や“相互関係”を効果的に活用して、サポートすることによって、“都市”が急速に失いつつある体験・教育機能を、質の高いレベルで提供することを可能にしている。このような機能を備えている点において、本郷の山村留学は、現代の子どもたちが精神的自立を果たすための“根っこ”ともいえる体験ができる場として、重要な役割を果たしていると評価することができる。

文献

財団法人育てる会（2001）：山村留学25年白書　昭和51年度～平成12年度の全国の山村留学実施状況調査

財団法人育てる会（2006）：全国の山村留学実態調査報告書　山村留学30年間のあゆみと未来展望・平成１７年度の全国の山村留学実施状況

川前あゆみ・玉井康之（2005）：山村留学と子ども・学校・地域　自然がもたらす生きる力の育成

本郷村教育委員会（2000）：本郷村史

NII-Electronic Library Service